

〔書評と紹介〕

矢田俊文・工藤清泰編

『日本海域歴史大系 第二巻 中世篇』

佐々木 浩一

はじめに 日本海域歴史大系は、監修者の小林昌二氏が清文堂ホームページの中で「列島史では必しも陽の当たらない周辺地域の北方史・東北史・沖縄南島史などが、従来の歴史像の歪みを是正する独自の個性や自立性の特徴を示す成果をあげている」とし、こうした中で本大系は「日本海域のさまざまな歴史的事象について、古代二巻、中世一巻、近世二巻からなる前近代の文献史学と歴史考古学による、八十余名の執筆陣からの論考とコラムをもって、列島の新たな歴史像構成に挑戦し、歪んだ歴史像の克服につながることを期している」と本書編集の意図を述べている。

本企画の第一回配本である中世篇は、小林氏の意図が十分に反映された内容で、北海道から北九州までが執筆の対象となっているが、考察の視野はロシア・中国まで及んでいる。一つ一つが選りすぐりの論文で、その内容の深さや鋭い切り口にただただ感心した私にとって、書評の任は重く、ここでは主に本書の紹介をさせていただくことをお許し願いたい。

本書の構成 本書は二編から構成されている。第一編は主に文献史学の論文を時代順に、第二編は中世考古学の論文を北の地域から南の地域

の順に収めている。

第一編 文献史学からみた日本海域

第一章 中世日本海沿岸地域の潟湖と荘園制支配をめぐる北東日本海交易

第二章 出羽三山と海・川・道

第三章 大陸からみた中世日本の北方地域

コラム 一 対馬と禅僧 二 戦国期若狭小浜に根付いた真宗

三 寛正の飢饉と北陸

第四章 戦国期北陸の本願寺と領主

コラム 四 一乗谷出土の甲冑部品に関するノート

第五章 十六世紀における西日本海域の構造転換

第二編 中世考古学からみた日本海域

第一章 北へ向かった人々―謎の埋納銭をめぐる―

第二章 中世の北海道島をめぐる北東日本海交易

コラム 一 北東日本海域の鉄生産

第三章 中世日本海域物流からみた地域性・境界性

コラム 二 瓦質播鉢の流通

第四章 中世西日本海域の都市と館―中世の山陰と京都―

各論文の内容 前項のように、本書には文献史学の立場からの論文五本、コラムが四本、中世考古学の分野からの論文四本、コラム二本が収録されている。各論文については、編者である矢田俊文氏が本書中に要旨を簡潔にまとめているので、抜粋しながら引用する。

(一) 文献史学からみた日本海域 『中世日本海沿岸地域の潟湖と

『莊園制支配』は、日本海沿岸の中世資料にあらわれる潟湖の多様な機能を莊園制の視角から掘り下げることを通じて、中世の水運など、日本海沿岸の実態を具体化している。

『出羽三山と海・川・道』は、出羽三山の成立と展開を明らかにし、出羽三山と越後・出羽北部、さらに内陸・最上川・太平洋沿岸との関連について考察している。

『大陸からみた中世日本の北方地域』は、大陸側から日本列島の北方地域を検討している。十三世紀から十五世紀のサハリンと北海道には中国と日本という二つの国家の影響が及び、日本人とアイヌ、アイヌとサハリンに居住するニヴフなどの先住民との間に、北の「倭寇的状况」とでも呼ぶべき、マージナルな状況が成立したことなどを明らかにしている。

『対馬と禪僧』は、朝鮮通交の重要拠点であった対馬と禪僧の関係を検討した論文で、日本から朝鮮への使者派遣は京都と対馬を結ぶ夢窓派の人的・法系的なネットワークが大きく作用していたことを明らかにしている。

『戦国期若狭小浜に根付いた真宗』は、戦国期小浜と本願寺派について検討した論文であり、本願寺派が多様な汎浄土信仰の担い手である小浜の庶民層を真宗門徒に編成したことを明らかにしている。

『寛正の飢饉と北陸』は、十五世紀後半に起こった奈良興福寺大乗院門跡領越前国河口荘の飢饉を検討している。

『戦国期北陸の本願寺と領主』は、歌人冷泉為広が延徳三年（一四九一）に管領細川政元に従って越後に下向した時の日記を分析することに

よって、越前・加賀・越中・越後の地域権力を明らかにしている。

『一乗谷出土の甲冑部品に関するノート』は、兜・鎧大袖などの武具が一括出土した戦国城下町越前一乗谷城下町の第一〇四次調査区を検討している。

『十六世紀における西日本海域の構造転換』は、西日本海沿岸には外海水運を支える港湾都市が古くから数多く形成されていたこと、十六世紀に日本海側の列島各地で銀山開発が進められ、銀の流れが生み出した物流の全般的増大は、すでに存在した鉄の流れと交叉して、西日本海域の大変動をもたらしたと述べている。

（二）**中世考古学からみた日本海地域** 『北へ向かった人々―謎の埋納銭をめぐって―』は、北海道函館市の志海苔埋納銭に焦点をあて、考古学的資料によって日本海域を中心とした人々の移動を明らかにした論文で、この埋納銭は十四世紀第四・四半期に埋納されたもので、アイヌの人たちの土地に倭人域を設定したことによる土地神への対価であった可能性が高いとする。

『中世の北海道島をめぐる北東日本海交易』は、北海道中世考古学の成果をもとに、北海道と本州の交易を手がかりにして、中世北海道島の歴史を考察したもので、北海道は本州のはずれではなく、日本海を結ぶ交易の環の一部であるとす。

『北東日本海域の鉄生産』は、中世初期の山野を舞台とした手工業は、山林資源を計画的に有効利用したことがうかがえること、東日本の鉄生産はいち早く最新の技術を陶器生産とともに取り入れながら、非專業的あるいは後進的とも評価できるとする。

『中世日本海域物流からみた地域性・境界性』は、奥州平泉の白磁をはじめとする貿易陶磁器の搬入ルートは日本海域ルートであったことなどを述べている。

『瓦質播鉢の流通』は、日本海沿岸に位置する遺跡から出土する奈良産瓦質播鉢から、日本海側と近畿地方を結ぶ人、もの、情報のルートが整備されたものであったとする。

おわりに 以上、ほとんどが小林、矢田氏の引用で、全く主体性のない文章となり読者には申し訳ないが、懲りずに、本書に述べられている矢田氏のまとめを紹介し終わりとしたい。

「北海道から北九州までの中世日本海域は、太平洋沿岸・瀬戸内海地域などと違い、いかに中国をはじめとした大陸や首都京都と密接に結びついていたのが理解いただけるのではないかと思う。また、現在となり、中世の人々が自然といかにつきあいながら生活し、生業を営んでいたのが理解いただけるのではないかと思う」と述べている。

(A5判、三三六頁、清文堂、二〇〇五年六月刊、価格本体三八〇〇円)
(ささき・こういち 八戸市教育委員会文化課)